

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 61 No. 4 2009

主幹 佐野 正之

巻頭言

英語の世紀に生きる

明治学院大学教授 ● 佐藤 寧

少し前の話になるが、『日本語が亡びるとき』と題した水村美苗の著書が、バスを待つ間、書店で時間をつぶしている私の目に飛び込んできた。さっそく、買って読んでみた。

水村氏は、私たちが「英語(という普遍語)の世紀」に突入し、しかもインターネットの普及がその流れを後押ししていると言う。たしかに、彼女の指摘を待つまでもなく、英語が世界語となりつつあることはイギリスの言語学者 David Crystal が10年以上前に書いた *English as a Global Language* の中で指摘している。ところが、彼女はこのまぎれもない現実と日本政府による貧弱な言語政策に言及した後で、英語に堪能な少数のエリート養成が我国にとっての喫緊の課題である、と同時に国語と日本文学の教育をもっと重視しなければ、やがて日本語は現地語として単なる話し言葉に成り下がり、その存続すら危うい、と警鐘を鳴らしている。いくぶん悲観的な言い方ではあるが、見当はずれとも思えない。

たとえば、同氏は平成21年度から本格的に始まる小学校英語教育に関しては明言を避けているが、私はこの「英語の世紀」に生きる子どもたちが、小学校5年生から英語に触れることはよいことだと考えている。しかしながら、それだけで英語に堪能な少数のエリートを育成できると考えるほど私も脳天気ではない。小学校の5、6年で週に1、2時間程度、中学校と高校で週に4、5時間程度、さらに大学ではせいぜい8単位(週2回で2年間)の学習をしたところで、日本語だけで生活が成り立ち、かつ語学力が就職にさほど影響を及ぼさない私たちの社会においては、ほんの一握りの英語に熱心な人たちを除けば、英語運用能力が格段に上達するはずもないし、ましてや流暢な英語を話せるようになることなど絵に描いた餅である。

それでも、このささやかな改革によって日本の英語教育はこれまでよりもよくなるだろうと、将来に希望を持ち続けている英語の先生が多い。その情熱に未来を託すしか今のところなさそうである。せめて、小学校英語では音声を重視してほしいものである。

話すことの「下地作り」を系統的に行おう

関西外国語大学教授 中嶋 洋一



1. 新学習指導要領が求めていること

今回の改訂では、「話すこと」に、新しく「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」という文言が追加された。今まで、週3時間(実際は2.6平均か)という枠組みの中でも、何らかの形でスピーチ活動に取り組んできているので、特に目新しいことではないかもしれない。ただ、今回はどこかでスピーチを経験させればよいというレベルではなく、3年間の一貫した指導、系統的な指導が必要になるという意味である。

そして、もう1つ。スピーチと聞くと、ついスピーチ大会という「形」を連想してしまうが、むしろ「まとまった内容の英文を書き、その原稿を見ないで、相手に伝わるように話す」ことを地道に指導するということである。

本稿では、話すことの下地作りとして必要な指導と、どんな「テーマ」が可能かということについて述べていくことにする。

2. 移行措置期間で取り組める指導アラカルト

3年間のビジョンを持つため、平成24年3月まで次のようなことに取り組んでみてはどうだろうか。

(1) 発音指導は英語の基本

教師がもっとこだわらなければならないのは、発音指導である。自分が正しく発音できない単語は聞き取れない。教科書の本文を読んでも、正しく読めなければ頭には入ってこない。

たとえば、読者の皆さんはbasketballの発音記号がすぐに書けるだろうか。正しくは[bæskɒtɒl]であるが、下線部などは特に意識して練習をさせなければならない。教師自らが正しく発音できるように自己研鑽をするとともに、事前に新出単語の発音記号を確認する習慣もつけておきたい。また、フォニックスなどは、ルールを頭から教え込むのではなく、いつ、どこで既習単語とくらべて気づかせるかといった全体構想を持たなければならない。

(2) 音読で発話の「基礎体力」作りを

日常的な教科書の音読は、「話す能力」の土台を作る。そこで、2年生なら、両面テープで1年生の教科書と合本してしまう。毎時間、読んですぐに理解できるようになる(発話につなげる)まで、徹底して音読をさせるのである。読むときは、アクセントの部分だけでなくstudent, about, get, bag, pencilなどのように消えてしまう最後の子音, a lot of, and I, is it, one of usのように子音と母音が連結する部分に赤字で印をつけ、常に意識をして練習させることが大切である。

また、日頃から文脈を正しく読み取らせるといった指導も必要だろう。たとえば、本文を読むときに長いポーズが必要な場所を考えさせたり、登場人物の気持ちを考えさせたりするのである。間をとることや気持ちを込めた話し方は、相手を引きつける大切な要素になるからである。

(3) スキルを高める「帯学習」の導入を

授業の最初には10分以内の「帯学習」を位置づけ、系統的にスキル・トレーニングをしたい。

たとえば、B5判かA4判で次のようなプリント(教科書に出てきたチャンク)を作り、生徒に配付し、90秒間ペアで相手に問題を出させる。2人分の答えられた数を合計して記録する。それを折れ線グラフに書き込んでいくというものだ。

1. after school	1. 放課後
2. by bicycle	2. 自転車
3. Nice to meet you.	3. 会えてうれしい
4. play the guitar	4. ギターを弾く
5. speak English	5. 英語を話す

いくつかパターンがある。1つ目は、教科書の基本本文を覚えるもの。左側が英文、右側が日本文である。2つ目は、Q&Aを練習するもの。左側が5 W 1 HやYes/Noで答える質問で、右側が答えの例となる。3つ目のパターンは、その変形で、答えるときに必ず1文をつけ足すというものである。Yes/Noの質問のときは理由を述べる。4つ目

は、相手の言う英文(左側)に対してOh, really? / No way! / I didn't know that. / You're kidding. などのスピーチバブルズ(右側)を言う。5つ目は、左側にももの名称(たとえば、はさみ)が書かれていて、右側には英語で説明(It is a tool. It is used when we cut paper or cloth.)が書かれている。生徒の実態に応じて、教師が作成し、小冊子にして渡しておくとうい。

(4) 発話力を高める語彙の指導を

聞き手の心を動かすような内容にするには、日頃から語彙を豊かにする指導、自分の知っている単語で言い換える指導(パラフレーズ)をしておくことだ。「豊かにする指導」とは、新出単語の指導だけにとどまらず、トリビア的な情報、派生語、関連語、同義語・反対語、接頭語・接尾語でまとめるなど、学習者の関心を引きつけ、「単語っておもしろい!」と思わせることである。特に、発話については意図的に多くのactive vocabulary(実際に使える語彙)を与えたい。

パラフレーズの訓練では、新出単語を導入するときに、できるだけ実際のもを見せながら説明したり、GDM(Graded Direct Method)で絵を描きながら英語で説明をしたりすることである。定期テストでは、英語で説明された内容(授業で行った新出単語の説明)を英単語1語で書かせる問題、あるものを自分の知っている語彙を使って説明するという問題を出すなど、指導(入口)と評価(出口)を連動させる工夫が必要である。

3. テーマが意欲を引き出す

さて、テーマだが、趣味、関心のあること、心が動いたことなど、生徒の実態に合った、できるだけ身近なものが望ましい。その際は、“My ~”や“My Favorite ~”というテーマにするといいやくなる。“My Favorite English Song”というテーマなら、実際に最初にイントロをかけてDJ風にスタートさせることも可能だ。

中学生がなかなか将来の夢が持てないという状況なら、“I want to be a person like (Ichiro).”や“After 20 years”といったテーマはどうだろうか。実際に歌手やスポーツ選手になることは無理でも、生き方にあこがれているという生徒は多い。“After 20 years”なら、多様な内容のものが登場

する。

よく、宿泊学習や修学旅行、職場体験など、学校行事の終わった後に、英語でスピーチをさせることがある。ただ、これらをテーマとしてそのまま自由に書かせるのは、無責任な指導である。同じような内容のスピーチが続くと、聞き方は「聞きたい!」という気持ちにはなれない。

こういうときは、「最も印象に残ったこと」「あつとき」「私の失敗」「今度行くなら」「後輩へのアドバイス」など、さまざまな視点を与えて、自分で選ばせるようにしたい。

教師は原稿を書く前に、マッピングで構想を練らせたうえで、アドバイスをしておくことが大切である。書くときにモデルとなる「基本パターン」を2,3与えておくこと、評価の視点を最初に伝えることも忘れてはならない指導である。評価は、シンプルに①声の大きさ、②英語(発音・アクセントなど)の適切さ、③内容のおもしろさに絞る。配点は③を最も高くする。集中して聞かせるためである。もちろん、個々のスピーチに英語でコメントを書かせることも可能だ。

以上のことは、Sunshine(開隆堂)ではLet's Communicateのコーナーで日常化させることができる。特定のトピックでoutput(書く、話す)しやすいように工夫されているので、ぜひ生かしていただきたい。

4. 「旬」の指導を心がける

よいスピーチは聞き手の心をとらえる。そのためにはgood listenerを育てたい。silent listener(黙って聞いている)ではなく、active listener(相手を傾聴し、自分も考える)にするということだ。それには、よい教材を「旬」のタイミングで与えることが大切になる。

先輩のよいスピーチを、モデルとして見せる(聞かせる)と、どの生徒も食い入るようにして見る。オバマ大統領のスピーチやレーガン元大統領のスピーチも格好の教材となる。相手を引きつける話し方が、ピンポイントで見えてくるからだ。それぞれ、いつ、どこで使うのか、その「段取り」を考えるのが教師の腕である。

「できる」ことを実感させる授業

北海道北見市立留辺蘂中学校教諭 高橋 良幸



1. はじめに

「英語は難しい」とか「英語の勉強の仕方がわからない」ということをよく耳にする。そのような生徒に対しては、授業以外に個別指導を行ったり、勉強の仕方を説明するなどして対応してきたが、目を見張るような改善は見られなかった。

そんな中、今まで経験したことのないぐらい習熟度が低い学年を担当することになり、頭を悩ませていた。そのような生徒たちには次のような共通点があった。

- ①「覚える」ことが苦手(決してできないわけではない)
- ②「調べる」ことを苦にする(慣れていない)
- ③勉強の仕方がわからない(自分で勉強できない)

今回は「英語は自分で勉強できる」「やればできる」ということを、授業で実感させるために取り組んだ実践を紹介したい。

2. 新文型の定着 ～自作ワークシートの活用～

新文型を学習した後、市販のワークや問題集をやっても、スムーズにできないことがある。その原因は、既習事項が身につけていない、言語活動などの練習が足りていない等の理由もあるが、英語が苦手な生徒にとっては、練習したことが頭に残っていない、つまり「覚えていない」ことが大きな原因の1つだと考えられる。覚えていれば「できる」ということを実感させるため、意識的に「覚える」活動を取り入れてみた。

ここでは4つのステップに分けたワークシートを使った実践を紹介したいと思う。なお、使用教科書はSunshine 2(開隆堂)である。

【STEP 1】<読んで覚える>

①ここでは5つの例文を提示し、それらをしっかりと覚えさせる。(以下Pro.3-1 be going toの例)

- (1) I am going to do my homework after school.
(私は放課後宿題をするつもりです。)

(2) You are going to read a book tonight.
(あなたは今夜本を読む予定です。)
(以下省略)

②教師の後について音読させたり、教師の言う日本語の後に英文を言わせる。これを何度かくり返す。

③各自で5つの文を覚える時間を与える。

④ペアで練習する。1人がプリントを片手に日本語を言い、相手が英文を言う。

このように、STEP 1では、さまざまな方法でしっかり英文を覚えさせる。

【STEP 2】<書いて覚える>

次に5つの例文の日本語訳を見て、それを英文で書く。文はSTEP 1とまったく同じものを使う。

- (1) 私は放課後宿題をするつもりです。(9語)
(2) あなたは今夜本を読む予定です。(8語)
(以下省略)

覚えれば書けるということを実感させるために、まったく同じ文を使う。書くときはワークシート上半分のSTEP 1の例文の部分折り、英文を隠して取り組ませる。そして覚えた英文を口に出しながら書かせる。どうしてもスムーズに書けない生徒に対しては、英文を見ながら書き写させるのではなく、1問ずつ見て確認し、覚えてから書くということをくり返させる。答えの英文が上(裏)に書いてあるので、だれでも取り組むことができる。書き終えたら、各自赤ペンでチェックさせる。

【STEP 3】<実践問題>

ワークなどにある一般的な問題を出題する。STEP 1, STEP 2の例文を少々アレンジして問題化する。適語補充、語順整序などの一般的な問題である。

- (1) 私は今夜本を読む予定です。
I () () () () a book tonight.
(2) 私たちは明日宿題をする予定です。
(to / we / do / going / homework / are / my / our) tomorrow. (1語使わない!)
(以下省略)

「できそうだ」「できる」と生徒に感じさせることが大切なので、生徒が覚えた文を生かせるように配慮する。時間がないうちは宿題にする。

【STEP 4】<発展問題>

ここでは発展問題を扱う。STEP 3まで終わった生徒が挑戦する。個人対応とし、できたら教師のところに持って来させる。

以上の内容を、B5サイズの用紙の両面にプリントして使っている。テストにこのプリントの英文を出題するので、これらの文を練習することを家庭学習で取り組む内容の1つにしている。そのため、扱う英文やその中の単語や熟語も、スパイラル的に覚えられるように配慮している。

3. 『スパイラル学習ワークシート』の活用

2, 3年生になると、教科書の文も長くなり、既習事項が定着していない生徒は、本文の理解に苦しむ。しかし、プラスに考えると、教科書の本文は、定着していないことを復習するよいチャンスであると言える。

Teacher's Manual付属の『スパイラル学習ワークシート』は、既習事項が何度もくり返し出てくるので定着を図ることができる。学年によってはそのまま使うが、少々難しいと感じる学年には、付属のCD-ROMにワークシートのテキストデータが入っているので、それを生徒の実態に合わせて作り直して使っている。

新しいセクションに入ったら配付して、やっておくように指示し、授業では解答の確認のみ行う(あまり時間をかけないように)。何度も同じ学習事項に触れることによって定着する点はもちろんよいが、自分で辞書を引けばできるという点が、最もよいと感じている。

4. 覚えたことを実践で使う

本校には週3回ALTが来校する。覚えたことを実践で使える絶好の機会である。Q&A, ハングマンなど何でもよい。自分が学習したことが使えるということを実感させるために、ALTにはそれらを引き出すような質問、活動を用意してもらう。今回の例であれば、What are you going to do after school?のような質問である。

ALTの活動は、実践を通して定着を図るという目的もあるが、日頃の学習の成果を実践で試すという目的のほうがメインである。

5. 家庭学習の取り組み

自分で学習する習慣をつけるために、夏休み・冬休みの課題は家庭学習ノートの提出とした。このノートは夏休み・冬休み限定のノートではなく、今まで家庭学習で取り組んだノートの続きを夏休み・冬休みに使わせる。自分で勉強するということを定着させるための試みである。だから複数冊提出する生徒も、もちろんいる。

内容は単語テストに向けた単語練習、ワークシート類や教科書の文の書き取り練習、英語で日記をつける等いくつかの項目を提示し、その中から自分に適したレベルのものを選択して行う。個々の生徒で、さまざまな工夫が見られるので、全体に紹介することもある。

6. おわりに

英語ができないという生徒の中には、怠惰な生徒だけではなく、「できるようになりたい」と思っている、学習方法がわからなかったり、きっかけがつかめずに学習を始められない者もいる。覚えることができた、覚えたことが使えた、覚えたことがテストに出た、を実感させることも、学習の意欲を喚起させる方法の1つである。

学校だけで1年で約100時間もの長い時間をかけて英語を勉強するのである。その時間を生徒の実態に合わせて有効に使い、次のステップにつなげたいと考えている。

参考文献

- 田尻悟郎(1994)『自ら学ぶ子が育つ英語科自学システム』明治図書
大塚謙二(2008)『成功する英語授業! 50の活動&お助けプリント』明治図書

カード教材を使用した ウォーミングアップ活動

千葉県八街市立八街中学校教諭 矢野 聡



1. はじめに

英語の授業で何が一番大切かと聞かれると、「○○である」と答えを1つに絞ることはできない。英語と聞くと何かとても難しく、自分にはできないものと最初から諦めている生徒は少なくない。現在、学習指導要領の改訂による小・中の連携、小・中学校双方の立場から、お互いを知り、今までの学習内容を見直すときだと言われている。今までとは違うという意識がようやく我々の現場にも起こりつつある。しかし、目の前にいる生徒はと言えば、そのようなことはまったく他人ごとであり、相変わらず英語の授業には消極的な生徒が多く、はじめから顔をふさいでしまっている生徒もいる。英語教師であれば、自分の授業で生徒の生き生きとした姿が見られないものと誰でも思うものではないであろうか。生徒は正直である。おもしろければ顔が上がり、どんどん積極的になる。一方、つまらなければ、顔を伏せてしまうのである。

我々現場の中学校教師は、教科を教えるだけではない。いろいろな会議をはじめ、校務分掌のさまざまな仕事、学級担任であれば学級経営に関する仕事、そして、中でも大きなウエイトを占める生徒指導、部活動の顧問と数え上げれば、枚挙にいとまがないほど何でも行わなくてはならない。それが中学校の教師である。その合間をぬって、教材研究をしなければならない。ましてや生徒の興味・関心を十分に引き出せる授業内容を考えなければならない。それは何年やっても大きなエネルギーを必要とする。

昨年度、千葉県の長期研修生として、小・中の連携というテーマで大学で1年間教科に関する勉強をさせていただく機会を得た。本来の目的は、小学校英語の副読本である文科省『英語ノート』の語彙を使用したカードを作成し、小学校の先生方に英語活動の際に気軽に使用して

いただくことであった。現在、中学校1年生の教科担任を行っているが、5月の連休明け頃からどうしても授業内容のマンネリ化で消極的になってしまう生徒がどのクラスにも出てきた。そのため、昨年度のカード教材を授業の最初に取り入れることにより、生徒の興味・関心を高められるのではと思い実践した。

2. カード教材について

カードは下のようなものである。手のひらサイズで携帯性があり、各カードにはカテゴリー、写真、スペル、組み合わせ表現が載せてあり、生徒が語彙学習をするうえでさまざまな活動に対応できるようにになっている。その他、A4サイズの教師用のカードも併せて作成し、導入や復習に使用する。カードとは別に、それぞれの語を説明するヒント文も作成した(次ページ参照)。色、性質、用途など多くの観点から目標とする語の特徴を記してあり、ヒントを聞いてカードを取るなどの活動に利用できるようになっている。

カード教材



Photo by ©Tomo.Yun (http://www.yunphoto.net)

各語彙のヒント文の例: bread

I'm a popular food. (カテゴリー)
I'm made of wheat. (原料)
I'm hard or soft. (性質)
My color is white or brown. (色)
I have many brothers and sisters. (種類)
I have a long history. (歴史)
Many people eat me every day. (時や場所など)
You spread (put) butter on me. (使用など)

3. 活動内容について

いろいろな活動内容が考えられるが、中でも、昨年度実際に小中学生に行ったもので反応がよかったものを選び実施している。いくつかの例を紹介する。

●Missing card(ミッシングカード)

まず、A4サイズの教師用カードを見せて写真の語を何度も発音練習する。リアルな写真があるので、生徒はカードをよく見る。カテゴリーも食べ物や身のまわりの品、フルーツ、昆虫など多岐に渡る。「英語では○○と言うんだ」と初めて知ったり、和製英語との違いを理解したりすることができる。そして、発音練習が終わったカードを1枚ずつ黒板に貼り、全部貼り終わったところで、生徒から見えないようにその中から1,2枚程度抜き、なくなったカードを生徒に推測させる。タイミングよくやるのが大切である。これは視覚に直接訴えかける活動なので、英語が苦手な生徒も積極的に参加することができる。

●カルタI(単語)

1つのカテゴリーについての発音練習が一通り終わった次の時間には、生徒用のカードを使用してカルタ取りを行う。ペアになり、順番を決めてお互いカードを見せ合い、ミッシングカードのときの記憶をもとに発音練習をする。生徒用にはスペルや組み合わせ表現が載せてあるので、こちらにも意識させながら、その単語に深く入り込むことができる。すべて練習が終わったところで、カ

ルタを机の上にバラバラに並べる。生徒は手を頭に当てて、教師が読む単語を取る。多く取れたほうが勝ちとする。カルタを取るスピードは、ペアによって速かったり遅かったりさまざまであるが、慣れてくるとペアに活気が出てくる。わざと違う単語を言ったり、フェイントをかけて読んだりすると非常に盛り上がる。

●カルタII(文)

カルタIで何度か練習をした後に、同じペアで再度カルタ取りを行うが、今度は単語のみを言うのではなく、組み合わせ表現と一緒に文の形で読む。教師が読む文の中に出てきた単語を取るというものである。生徒は単語だけでなく文全体を聞くことになるので、組み合わせ表現も自然に覚える(この表現は、その単語と一緒によく使われる単語を組み合わせたもので、複数のネイティブスピーカーに選んでもらった語の中でも最も頻度の高い単語を組み合わせている)。

●カルタIII(スリーヒント)

次に、スリーヒントカルタを行う。カルタを取る際に、その単語は言わず、その単語を示唆するヒントの文を(難しいヒントからやさしいヒントへ)1つずつ言っていく。これもカルタを取るためには、ヒントを聞かなくてはならないので、結果的に多くの英文を聞くことになる。慣れてくるにつれて違ったヒントを出したりすると盛り上がる。あらかじめ1つの単語に関しては20文程度のヒント文を作っておくとよい。

4. おわりに

多くのカードを作成することは大変な作業ではあるが、一度カードを作成すれば、さまざまな活動に使用することができる。授業の最初の10分程度でこのような活気のある雰囲気を作ることができると、その後の授業への生徒の姿勢も変わってくる。当然のことと言えば当然であるが、生徒は楽しければ顔が上がるし、わかれば「次は何だろう」という気持ちに駆られる。毎回の授業でやり続けることは大変なことであるが、さまざまなアイデアを使って、英語に関心や意欲を持たせることがまず大切なことである。



帯学習による Creative Inputのすすめ

富山県南砺市立福光中学校教諭 森田 康寛



1. Mechanical InputからCreative Inputへ

私は、7年前からQuick Responseという帯学習(ペアによるQ&A活動)を始めたのだが、当初はこの名前の通り質問に対して素早く答えられる力(たとえば、Doで尋ねられたらdoで答えるなど)を身につけることを目標に始めた。しかし、何度かくり返してやっていると、確かに質問に対して素早く反応し、正しく答える力が身についたと思うが、そのうちに生徒の口から「つまらない」「クイック・レスポンスは嫌だ」という言葉が出てくるようになり、中には「これって本当に英語を話す力がついてくるのですか」という生徒も出てきた。確かに、ペアで問答を行っているときの生徒の表情は退屈そうで、生徒が言うように「英語を話す力」が身につく活動にはなっていなかったようだ。

このような生徒の反応をきっかけに、Quick Responseシートの改良を重ねていった。改良の1つ目の視点は、「生徒が日常会話でも使うような生き生きとしたベーススキット作り」である。ある教科書の巻末にもQ&Aのペア活動を取り上げているが、やはりそれだけではなかなか会話力にまでは結びつかず、Communicationにはなかなか届かない活動に終わってしまう。つまり、Mechanical Inputからは、Mechanical Outputしか生まれないのである。

そこで、改良の2つ目の視点として、「Creative Outputを行うために、Creative Inputを行う」ということを意識してベーススキット作りを行った。生徒が自分の意志で選択したり、自分の興味がある単語を自由に使える部分ができるだけ多くなるようにベーススキットを作ったのである。

Mechanical Inputでは、思考をほとんど介さないために、機械的に答える定着度は速いが、またすぐに忘れてしまう確率も高い。しかし、Creative Inputを行えば、発話の中に自分の意志や思いが加わり、メッセージ性が生まれてくる。そのう

えでスキットを行うことで、生徒は思考を使い、スキットの場面が鮮やかに脳裏に焼きつき、言語材料が効果的に定着するのである。しかも、自分のこだわりの語を用いているため、生徒たちは生き生きと楽しそうに会話を楽しむのである。中には、「友だちとおしゃべりを普通に英語でやってしまった」という生徒まで出てきた。

2. Quick ResponseからSmall Talk, オリジナルスキット作りへ

Quick Responseをベースにして、マッピングを取り入れて、Small Talkに取り組んでみた。Quick Responseのベーススキットから連想されるテーマを中心に書き、そのテーマに関連して英語で言えそうなことを日本語でマッピングさせる。次に言いたい順にナンバリングさせ、ペアで練習をさせる。その後、フリーでのSmall Talkに発展させていく。口慣れた表現をベースにしているため、生徒たちは難なくベーススキットをSmall Talkに発展させ、会話を楽しむことができる。

生徒は各自練習ノートを持っており、課題としてQuick Responseをベースにしたオリジナルスキット作りに取り組ませている。日頃から口慣れているスキットをベースにしているため、生徒はスラスラとあっという間に数行のスキットを書くことができる。

3. 生徒の感想

最後に生徒の感想を紹介して終わりとしたい。この生徒の感想はQuick Responseの本質を非常にうまく表していると思う。



私の授業実践

—生徒から学ぶ改善の視点—

大阪府大阪市立咲くやこの花中学校教諭 今井 祥詠



現在、私が授業を進めるうえで意識していることは、授業を生徒の実態をふまえて組み立てることです。生徒たちができるようになったこと、反対に、まだできるようになっていないことは、彼らがどんな指導を必要としているかを私に教えてください。それらを的確に把握し、授業を工夫改善していくことが何よりも生徒たちの力を伸ばすことにつながると考えています。

1. 現在の課題

定期テストで週末にしたことを感想や意見を交えて表現する問題を出題したときのことで。ほとんどの生徒は、読み手が十分その内容を理解できる文章を書きました。授業で、英語の語順をくり返し指導している成果だと考えています。しかしその一方で、綴りの誤りが目立ちました。語彙の知識を問う問題でも、正確に書けない生徒が多いことがわかりました。

この結果を受けて、音と綴りを関連づけて指導することが不十分だったと気づきました。この点については、新学習指導要領にあげられていることもあり、指導を少なからずしていましたが、徹底できていなかったのです。さらに、この結果から予想できたのが、自力では単語を読めない生徒も多いのではないかとということでした。

これらを課題とし、現在は、音と綴りを関連づけた指導をこれまで以上に積極的に行っています。基本的な綴りのものであれば新出単語であっても、自ら読んだり、書いたりできることをめざして格闘中です。

また、ある定期テストでは、意味もわからず英文を覚えている生徒がいることが明らかになりました。教科書の文章や新出文法事項を含む短い英文を聞き、その意味を答える問題を出題したところ、特に英語の学習に自信を持っていない生徒の正答率の低さが目立ちました。それらの英文は、授業で何度もくり返し練習し、ほとんどの生徒が、

英文を口頭ですらすら言うことができていました。もちろん、意味の確認もしていたので、当然、理解していると思い込んでいましたが、そうではありませんでした。

基本的な英文をくり返し学習し、口頭で言えることは、聞く力、話す力、書く力、読む力につながっていると考えています。しかし、それは、英文の意味を確実に理解しているからこそであって、意味もわからず、ただ英文を呪文のようくり返しているだけの生徒は、おそらく応用ができないはずで。そのことに気づいたとき、私の指導を信じて、一生懸命に練習に取り組んでくれた生徒たちに申し訳ない思いでいっぱいになりました。現在は、英文のみをくり返し練習するだけでなく、意味のまとまりごとに日本語を英語に言い換えるなど、練習活動を工夫しています。

2. 授業改善に向けて

必要な指導上の課題をふまえて授業を改善していくうえで、不可欠なのが到達目標だと考えています。英語を聞く、話す、読む、書くことによって、生徒に「英語で」できるようになってもらいたいことが明確になっていないかぎり、必要な指導は見えてこないからです。日々の授業の内容は、3年後、1年後、学期末といった一定期間にできるようになってもらいたい到達目標をふまえて、組み立てるようにしています。

日々、到達目標と生徒の達成状況を意識した実践を継続することで、私の授業は確実に変わってきています。1年前は考えもしなかったことを授業に取り入れるようにもなりました。正直なところ、一人ひとりの課題に応じることの難しさも実感しています。しかし、できるようになったと喜んでくれる生徒たちが私に力をくれます。これからは一人でも多くの生徒と喜びを共感できるよう、日々の授業を大切にしていきたいと思っています。

第57回 中村英語教育賞 入選論文発表

第1位：該当者なし

第2位：The Value of Dictogloss for Japanese Senior High School Students

神奈川県立有馬高等学校 甲斐 順

分詞構文の表現効果・使用レジスター研究に基づく授業実践

～分詞構文は高校でどう取り扱われるべきか～

大分県立安心院高等学校 渡辺 真一

第3位：The Effect of Shadowing with Different Text Level on Listening Proficiency

秋田県立横手清陵学院高等学校 濱田 陽

◆審査員◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授) 高梨 芳郎(福岡教育大学教授)

山岡俊比古(同副委員長・兵庫教育大学教授) 萬谷 隆一(北海道教育大学札幌校教授)

白畑 知彦(静岡大学教授)

概評

審査委員長 佐野 正之

前回は3篇しかなかった応募論文が、今回は6篇に増加しました。しかも、どの論文も現場の指導に直接かかわる問題意識にもとづく研究で、それぞれに興味深い点がありました。審査委員は論文を精読し、テーマの「独創性・発想力」「内容の充実度」「構成力」「表現力」「応用性・実用性」などの観点から第一次審査を行いました。

その結果、上記の3篇を入選としました。いずれも問題意識が明確で、文献研究で論点を明らかにしたうえで妥当な調査を行い、結果を論理的に考察して論じており、現場での教師による調査研究として評価できると審査員一同が判断しました。

それ以外の論文では、「論点があいまいで、一般的な指導の工夫の羅列にすぎない」、「データ処理だけで、指導の知見が得られない」などの欠点が指摘されました。また、論文の「応用性・実用性」を問われた論文もありました。

しかし、入賞した3論文も完璧だったわけではありません。それぞれに改善してほしい点が指摘されました。甲斐論文と濱田論文は、それぞれに特定の指導法の効果を論じているのですが、それ

ならば、より長期な調査が必要であり、途中の経過、特に生徒の意識の変容などが報告されていないと、十分な説得力を持たないという指摘が複数の委員から寄せられました。一方、渡辺論文については、視点は興味深いですが、実践の期間や範囲が限られていて、本格的な論文というよりはパイロット的であるという指摘がありました。このような批評を生かして今後の研究に役立てられることを期待します。こうした議論の結果、今年度に関しては、第1位論文は「該当者なし」と判定しました。

また、応募者の中に以前にも本賞を受賞された方がおられました。より多くの方に受賞機会を与えたいという本賞の趣旨からして、次回以降、「本賞を受賞したことがある方は、応募資格なし」とする規定を新たに設けましたので、ご承知いただきたいと思います。

最後に、多忙な中、ご応募くださった皆さんに心から敬意を表すると同時に、今一度、研究と実践を結びつける実践研究こそ、本賞の目指す姿であることを強調して、次回に期待します。

講評

審査副委員長 山岡 俊比古

この講評では、入選した3つの論文について、それぞれその内容を解説し、評価結果について説明し、さらによりよい論文を書くためのアドバイスを行います。

甲斐論文

〈内容〉

この論文は、18人の高校1年生を被験者としてディクトグロスを行い、英語学習におけるその役割を、被験者に対するアンケート調査の分析と再現されたテキストの分析によって明らかにすることを目的としています。アンケートは被験者がこのタスクをどのように感じたかを問うもので、再現テキストの分析においては再現の程度が問題とされています。

アンケート調査の分析結果によると、被験者はこのタスクを難しいけれどもおもしろいものとしてとらえ、聴解能力を中心とした英語力の向上を図ることの必要性和協働作業の重要性を認識したことが明らかとなったとされています。

再現テキストの分析結果は、ペアの4組と、3、4人からなる3つの組、合計7組それぞれに示されています。オリジナルテキストの総語数55語に対して、その再現程度は組によって異なり、13語から40語までに渡っており、平均は29.14語となっています。再現程度はペアの組よりも3人以上の組のほうが高いことも示されています。

再現程度の最も高い組の再現テキストを分析すると、冠詞、前置詞、複雑な文等に問題のあることが確認され、このことからオリジナルテキストを再現することの難しさがよくわかると指摘し、他の組の再現テキストについてもなおさら同じことが言えると結論しています。

〈評価〉

この論文は英語で書かれていますが、英文そのものも含め、論文の構成や論の進め方については、すべての審査員が高い評価を与えています。さら

に、学習者の声から学ぼうとする姿勢や、授業への還元性も特に優れた点として評価できると思います。

批判点としては、ディクトグロスの効果を学習成果と直接的に関係づけて分析していない点をあげることができます。この論文の問題点は、すべてこの点に関係しています。つまり、1回きりの実践で、質的な分析に乏しく、テキストの難易度と学習者の熟達度の関連づけがなされていないことなどです。

〈アドバイス〉

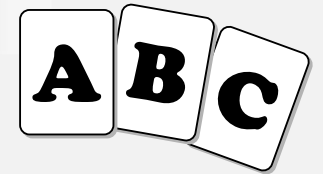
上記の批判に応えるためには、実践を多く重ね、長期的にデータを取り、質的に分析することが求められます。長期にわたる研究は容易ではありませんが、このような研究が実質的にできるのは、現場の教師であるということも見逃してはいけません。

渡辺論文

〈内容〉

この論文は、高等学校で指導する分詞構文に着目し、一方で15名の高校英語教師に対してこの構文の認識程度と教え方についてのアンケート調査を行い、他方で分詞構文の表現効果と使用レジスターを改めて確認し、このような分詞構文の特徴が生徒の使う教科書・総合英語参考書・文法指導書でどう扱われているかを調べ、そのうえで必要な分詞構文の指導方法を考案して実際に指導を行い、その結果を報告したものです。

調査の結果として、分詞構文は事象を生き生きと描写する効果を持ち、話し言葉よりも書き言葉において、科学的書物より小説において、非描写的文章より描写的文章において多用されるが、アンケートに答えた英語教師はこのことを十分に認識していないことが指摘され、生徒が接する教科書・総合英語参考書・文法指導書でも十分に説明されていないことが指摘されています。



小学校と中学校をつなぐために

北海道教育大学札幌校教授 萬谷 隆一

授業実践では、2時間をかけ、分詞構文の表現効果と使用レジスターを解説したうえで分詞構文を用いた自由英作文を書くように促したところ、分詞構文を用いた者は27名中4名のみであり、分詞構文の学習が容易でないことを示す結果となりました。しかし、この授業の印象について生徒から取ったアンケートの結果によると、生徒はこの授業に対しておおむね好意的であったとしています。

〈評価〉

この論文の利点は、授業改善という意図が明確であることと、構文を単なる規則としてではなく、その存在理由にまで触れて指導することの意義を示したことにあります。また、現場における実態を踏まえ、学習者から授業の感想も採取している点も含め実践的であるという利点もあります。

しかしながら、教師に対するアンケート調査は小規模であり、授業実践も1つのクラスについての一度かぎりの試行のみでは十分とは言えません。とりわけ、授業効果の確認のためのデータ採取において、ただ単に生徒に分詞構文を使うように指示を与えるだけでは方法論として心許ないと言わざるを得ません。

〈アドバイス〉

分詞構文の指導方法の精緻化^{せいしち}が求められます。おそらく、より時間をかけ、理解活動を通じた基盤作りをした後で表出に移行し、使用レジスターを明確にしたうえでの創意に富んだ何らかの表出活動が必要となるものと思われます。授業効果の確認のための方法も考える必要があります。

濱田論文

〈内容〉

この論文は、45名の高校生を対象として、シャドーイングの効果に関して、シャドーイングで用いるテキストの難易度の違いと学習者の聴解における熟達度との関係を確認することを目的としています。つまり、どのような難易度のテキストをどのようなレベルの聴解熟達度を持つ学習者に使えばシャドーイングが効果的かということを確認することです。

高校生はAとBのグループに分かれ、Aはやさしいテキストを用い、Bは難しいテキストを用いてシャドーイングを行い(通常の授業時間の約半分を使い、13回行った)、その効果を事前と事後の聴解テストで測ったところ、Aにおいて向上を示す有意傾向が確認されたので、さらに細かく分析するために、このグループの被験者を聴解熟達度で上下の群に分け、それぞれ聴解テストの3つの問題レベル(聞くパッセージの長さによる区分で、レベル数が上がるほど長い)ごとに再分析したところ、聴解熟達度の低い被験者群が、問題レベル3において有意に向上し、問題レベル2で有意傾向を伴う向上を示したとされます。

このことから、結論として、シャドーイングは学習者が対応できる認知レベルにおいてなされるべきであり、熟達度の低い学習者に対してより効果があるという従来からの指摘を再確認するものとなったとされています。

〈評価〉

この論文の利点は、シャドーイングという注目すべき指導法を取り上げ、2つの学習者グループを用い、使用テキストの難易の区別、聴解テストにおける問題レベルの区別、学習者の聴解熟達度の区別を行って、シャドーイングの効果の確認を細かく統計的に確認したことにあります。

しかしながら、この細分的な分析において、結論として取り上げられた部分と、取り上げられなかった部分との解釈的な整合性が必ずしも保たれていないという弱点があるようです。たとえば、Aの熟達度の低い被験者群が聴解テストの問題レベル1において、なぜ向上を示さなかったのか疑問が残ります。

〈アドバイス〉

このような細かい統計分析を行う際には、常に全体的な整合性の維持に配慮する必要があります。また、論文構成(論点の提示順序と関連づけ)についても改善の余地があります。さらに、この論文のように英文で書く際には、当然のことながら英語の正確さに注意することが求められます。

※各入選論文につきましては、開隆堂出版webページにて掲載しております(<http://www.kairyudo.co.jp>)。

1. 小学校英語の授業から中学校教師が感じること

これから中学校の先生たちは、小学校英語の授業を見ることが徐々に多くなっていくと思われま。小学校の英語活動を見た中学校の先生たちの反応はさまざまですが、プラス面では「子どもたちが生き生きしている」「ゲームが多くて楽しい」など授業の活発さに驚く先生たちや、発音など子どもの吸収力に驚く先生も多いと思います。

一方で、マイナスのイメージを持たれる先生もいます。たとえば「楽しいばかりで定着が不十分」「練習の効率が悪い」「文化紹介に時間をかけすぎ」などです。これらは、英語の定着を目指す中学校の先生たちの「職人魂」が言わしめている言葉です。小学校英語活動の一種の「ゆるさ」に中学校の先生たちは違和感を覚えられるのでしょう。

小中連携を進めるうえで、中学校教師として、こうした小学校英語活動の「ゆるさ」をどうとらえるかです。中学校の基準からすると、きっと生ぬるいと感じる方もいるでしょう。しかし、その「ゆるさ」には、もちろん小学校の先生の英語指導への不慣れさもあるのですが、「ゆるさ」の背後に小学校の先生なりの配慮がある可能性にも気づいていただきたいのです。小学校英語活動の「ゆるさ」は、授業の進め方を子どもに合わせようとする小学校の先生の指向性の反映だったり、子どもに合わせて動機づけを高める方法や素材を見立てる柔軟さの反映であったりすることがあります。ぜひ英語力や指導技術のみから小学校英語の授業を判断せず、どこかで小学校の先生のよさを感じる心も持っていたいただければと思います。

2. 小中をつなぐうえで大切なこと

先日、札幌市立向陵中学校で、小中連携の試みを拝見しました。近隣の小学校の先生方に中学校での教育を紹介する全校企画で、小学校の先生方が自由に中学校の授業を参観できるイベントでした。英語の授業も、楽しさあふれる中学校らしい授業でした。しかし、この学校の素晴らしいところは、授業公開にとどまらない、さらなる企画を考えて

いたことでした。

その企画は「成長した卒業生との再会」とも言うべきもので、小学校の先生たちがいる会議室に、かつて教えた卒業生が一人ずつ入ってきて作文を読みます。小学校生活や担任の先生の思い出、入学後の自分の成長ぶり、今何を頑張っているかなど、かつて小学校で担任だった先生に感謝の意も込めて語るのです。

「僕は小学校時代、〇〇先生によく叱られました。今は忘れ物ありません！」

「中学の英語は大変ですが、小学校で〇〇先生に習った英語がとても役立ってます。」

「先生から頑張ることの大切さを学びました。」
すっかり成長して立派になった卒業生の声を聞いて、小学校の先生たちはいかにも感慨深げでした。「小学校時代の〇〇君はどうなるか心配だったけれど、本当に立派な中学生になって先生は嬉しい」などと話した先生もいました。

中学校の先生たちも後ろのほうで、その話を聞いています。おそらく、中学校で自分たちは卒業生をしっかりと育てていますという暗黙のメッセージを、小学校の先生方に感じてほしいという思いを抱きつつ。そして一方で、小学校の先生たちの言葉から、小学校の先生たちがどれだけ子どもたちを大切に育てていたかもきっと感じつつ。

小中連携について、小学校、中学校の教師ともに「お互いの学習内容の確認程度」でよいと考える傾向があると言われています。確かに、小中連携では、互いの理解を深め、カリキュラムや指導方法の接続性を高めることは重要です。つまり小学校英語と中学校英語の間に渡りやすい橋をかけるということです。しかし、その前にもっと教師が感じるべきことがあるのだと、この学校の取り組みは教えてくれているような気がします。小中をつなぐうえで大切なのは、橋をかけることがすべてではなく、実は、学校の枠を越えて、そこを渡る子どもたちを大切に育てようとする教師同士が響き合うことなのではないかと。

居場所のある英語の授業

グループ学習を始めてから、授業の雰囲気が変わった。活動的だとは思えなかったクラスの生徒が声を出すようになり、表情も明るくなった。ウトウトする生徒もいなくなっただけでなく、授業に参加する生徒が増えてきた。それまでは「着席」だった生徒も「出席」するようになったのだ。

苦手な生徒にとって英語の授業は苦痛なものだ。音読しろと指示されても読めない、板書を写せと言われても何が書いてあるのかよく理解できない、覚えろと言われても、何が何だかよくわからない(ちょうど、ハングルを知らない私たちがハングルを読めと言われても、チンプンカンプンなのによく似ている)。授業に取り組もうとしても、授業についていけない。自分がその授業で居場所を見つけられなくなる。それは一部の生徒かもしれないが、教師にとっては「意識せざるを得ない生徒」として、大きなストレスになる。これでは生徒と教師、双方にとって生産的ではない。

グループ学習には、生徒の英語学習に対する壁を壊してくれる効果がある。音読で読みがわからなければ、友だちに聞ける。板書の意味がわからなくても友だちに聞ける。全体の前で教師に質問するのは勇気が必要だが、友だちには気軽に聞ける。そして、聞かれた友だちも、教えることで自分の理解が深まっていく。そのうえグループの中の1人という匿名性の低い中では、学習に対する責任感も生まれてくるようだ。自分が聞くだけでなく、いつ自分が聞かれるかもしれないという気持ちや、自分が必要とされる空間がそこにはある。つまり、居場所がある。グループ学習がうまくいくと、生徒は生き生きとして、教師も「妙なプレッシャー」を感じなくなる。

グループ学習では、グループで問題を解決していく課題と、生徒が1人で取り組む課題とをリンクさせることだ。たとえば私は次のように授業を進めていた。

授業の最初に、その日に学習する部分を音声で

流し、What is this passage about?とか、What is the topic of this passage?という課題を与える。リスニングをしているときには、生徒はキーワードや情報のメモを取り、自分の力でリスニングと向かい合う。次に、聞き取った情報をお互いに交換し、グループの中で答えは何かを相談してから、もう一度、リスニングをする。そして、自分の聞き取りが合っていたか、グループでの結論が合っていたかを確認する。正解していたときは本当に高校生かと思うほどの無邪気な笑顔になり、不正解のときには残念そうな顔をする。グループ学習を始める前には考えられなかったほどだ。

本文の理解も、グループ学習を通じて深めていく。わからないところがあればお互いに助け合い、どうしてもわからないときは、手をあげて私を呼ぶ。騒がしく感じられるかもしれないが、ほとんどが内容理解のための話題である。

音読の後には対面リピート。これはペアを組み、何も見ないで、パートナーの発音を聞いて、リピートしていく学習だ。自分の発音が間違っていると相手はリピートできないという責任と、相手を読んでもくれたものをしっかりとリピートしなければいけないという責任とが合わさり、活発な活動になっていく。

これは英語が好きだという生徒が、入学時には皆無であった前任校での話だ。そんな「マイナス」からのスタートでも、生徒が「自分たちも授業に参加しているという意識＝居場所」を持てれば、自然と学習するようになり、学力も向上していく。

授業の技術を学ぶことも大切だが、授業の中で生徒の居場所を考え、確保する援助をすることも重要なことではないだろうか。

(千葉県立成田国際高等学校教諭 組田 幸一郎)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2010年1月、3月、5月、9月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。